

エデンの秘密

ベレーシート

●今回の「ヘブル・ミドゥラーシュ」のテーマは「エデンの秘密」です。なぜこのテーマかと言えば、イエシュアが宣べ伝えた「御国の福音」と密接にかかわっているように思うからです。このつながりを見出すことは、神のご計画の全貌を知る上でこの上なく重要です。私は現在「教会がユダヤ的ルーツとつながり合わせることで回復し完成する」ということを検証するために、マタイの福音書をギリシア語からヘブル語に戻して解釈(ミドゥラーシュ)しようと試みています。また神田満牧師もマルコの福音書に使われているヘブル語を取り出し、「初回言及の法則」にしたがって語彙の本来の意味をさぐりつつ、御国の福音の真意を解釈しようとしています。まだ二人ともそれぞれの福音書の始まりの部分の取り組みでしかありませんが、これまで分かって来たこととして、「エデン」にまつわる情報がきわめて重要だということです。

●イザヤ書 46 章 10 節に「わたしは、**終わりの**事を**初め**から告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる』と言う」とあります。ここで「**終わり**」(「アハリート」אֲחִירִית)とは、神のご計画が成し遂げられる最終ステージのことです。ここで驚かされるのは、神のご計画の最後に起こる出来事が、「**初め**(「レーシート」רֵאשִׁית)から告げられている」ということです。とすれば、私たちは聖書の最初を特に注意深く読み直さなければなりません。そして神のご計画の全貌とその整合性を悟らなければならないのです。そこで今回は、創世記 2~3 章の「エデンの園」について書かれている箇所から、とりわけ 2 章の「エデンの秘密」について学んでみたいと思いますが、これは今後も書き足していく私なりのひとつのノートと考えていただければと思います。

●創世記 2 章全体を 4 つの部分に分けて、その一つひとつを取り上げて学んでいこうと思います。

1. 人間の創造・・・・・・・・・・・・・・・・ 4~7 節
2. エデンの園に置かれた人、および木と川・・・ 8~14 節
3. エデンの園における人間の務め・・・・・・・・ 15~17 節
4. ふさわしい助け手との一体・・・・・・・・ 18~25 節

1. 人間の創造

【新改訳 2017】創世記 2 章 4~5 節

2:4・・・神である【主】(יְהוָה אֱלֹהִים)が、地と天を造られた(עָשָׂה)ときのこと。

2:5 地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えて(צָמַח)いなかった。神である【主】が、地の上に雨を降らせていなかったからである。また、大地を耕す(עָבַד)人もまだいなかった。

●創世記 1 章では「**天と地**」となっていて、天にあるものについても記されていますが、創世記 2 章では「**地と天**」となっており、天に関する記述がありません。もっぱら「地」に関することだけです。「大地」の「アダーマー」(הָאָדָמָה)と「人」の「アダム」(אָדָם)は語呂合わせとなっています。また、創世記 1 章は「**神**」(「エローヒーム」אֱלֹהִים)であるのに対し、創世記 2 章では「**神である主**」(「アドナイ・エローヒーム」יְהוָה אֱלֹהִים)となっています。

●さらに、創造の動詞も創世記 1 章では「**バーラー**」(בָּרָא)となっているのに対し、2 章では「**アーサー**」(הִשָּׁר)という動詞(不定詞)が使われています。創造の順序も創世記 1 章では植物が人間よりも先に造られたのに対し、創世記 2 章では植物よりも人間が先に創造されています。一見、まるでさかさまのように見えます。そもそも 1 章と 2 章では資料が異なるという見解がありますが、創造の視点が異なっているだけです。ですからその視点の違いを矛盾と見るのではなく、相補的・補完的・重層的に見なければなりません。イエシュアもパリサイ人からの離婚に関する質問に対して、創世記 1 章の「創造者は、初めから人を男と女に造って」と語り、続いて創世記 2 章の「それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ」と言って、「人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません」と答えています(マタイ 19:4~6)。つまり、イエシュアは創世記 1 章と 2 章を一つに結びつけて語っておられるのです。

●創世記 2 章 5 節の時点では、普通の実のなる「木」(「エーツ」עֵץ)ではなく、みずぼらしい灌木(低木)である「スイーアッハ」(הִשִּׁי)が用いられています。その理由は、「神である主」が地の上に雨を降らせていなかったからということと、まだ大地を耕す人間が造られていなかったからです。しかし人が造られることで、**野**(「サーデ」שָׂדֵה)は「**麦畑**」となり、イエシュアの弟子たちは安息日に「麦畑の穂を摘んで始めています」(マタイ 12:1、マルコ 2:23)。またイエシュアは御国のことを「**畑**(「サーデ」שָׂדֵה)に隠された宝のようなもの」とたとえています。

●2 章 6 節には、人間の創造が「木」と「水」と密接な関係があることを示唆しています。

2:6 ただ、豊かな水(אֵד)が地から湧き上がり(עָלָה)、大地の全面を(אֶת-כָּל-פְּנֵי-הָאָרֶץ)潤していた(שָׂקָה)。

●「エード」(אֵד)という語は、この箇所とヨブ記 36 章 27 節の 2 回しか使われていません。口語訳と七十人訳が「**泉**」と訳し、新改訳、新共同訳、フランシスコ会訳が「**水**」、岩波訳が「**地下水**」と訳していますが、新改訳 2017 では「**豊かな水**」と訳しています。それは、地から湧き上がる水が大地の全面を潤すほどのものであったからだと推察します。他にも「水蒸気」とか「霧」といった意味があります。

●この「豊かな水」(単数)が地から「**湧き上がり**」と訳された言葉は「**アーラー**」(הָעָלָה)です。これはイエシュアに関係する重要な語彙です。イエシュアはしばしば山に登られましたが、その行為は預言的です。ヘブル語の「**アーラー**」(הָעָלָה)は、単に「登る、上る」を意味するだけでなく、「(いけにえを)ささげる」とか「反芻する」といった意味があります。「反芻する」動物はきよい動物であり、全焼のいけにえや罪

のいけにえとして祭壇にささげられる牛や羊です。つまり、イエシュアが「山に登る」という行為は、やがて聖なる山エルサレムにおいて神にささげられる神の小羊イエシュアが、地にあるすべてのものに、渴くことのないいのちの水を注ぐというイメージを暗示させます。このことは創世記 2 章 10 節でも再び取り上げます。その間に、人間の創造が挿入されています。

2:7 神である【主】は、その大地のちり(עָפָר)で人を形造り(יָצָה)、その鼻にいのちの息を吹き込まれた(נָפַח)。それで人は生きるもの(נֶפֶשׁ חַיָּה)となった。

●「いのちの息」(「ニシュマツト・ハツイーム」נְשֻׁמַת חַיִּים)。聖書でここにしか出てこない語彙です。「息」のことを「ネシャマー」(נְשָׁמָה)と言い、その連語形が「ニシュマツト」(נְשֻׁמַת)となります。「ニシュマツト」が単数形であるのに対し、「いのち」が複数形となっているのは、「エローヒーム」と同じように、畏敬を表わすものと言えます。

●ヘブル語で神の「息」のことを一般的に「ルーアツハ」(רוּחַ)と言いますが、以下の箇所を見るなら、「ネシャマー」(נְשָׁמָה)と「ルーアツハ」(רוּחַ)とは同義だと理解できます。ちなみにそれぞれの使用頻度は、「ルーアツハ」が 389 回であるのに対し、「ネシャマー」はわずか 24 回です。

ヨブ記 4 章 9 節「彼らは神の息吹(נְשֻׁמַת)によって滅び、御怒りの息(רוּחַ)によって消え失せる。」(新改訳 2017)
 同 27 章 3 節「私の息(נְשָׁמָה)が私のうちにあり、神の霊(רוּחַ)が私の鼻にあるかぎり、・・・」(同)
 同 32 章 8 節「確かに、人の中には霊(רוּחַ)があり、全能者の息(נְשֻׁמַת)が人に悟りを与える。」(同)
 および同 33:4、34:14。イザヤ 42:5、57:16 を参照のこと。これらの例から、「ネシャマー」と「ルーアツハ」が同義的パラレリズムであることが分かります。

●「生きるもの」=「生ける魂」(「ネフェシュ・ハツヤー」נֶפֶשׁ חַיָּה)。この表現は人間だけでなく、創世記 1 章 30 節にあるように、**生きるいのちのあるすべてのもの**に対しても使われています。2 章における人間の創造の特徴は、神が人の「鼻(複数)にいのちの息を吹き入れた」ことにあります。そのことが他の被造物との大きな違いです。七十人訳は鼻ではなく「その顔にいのちの息を吹きかけた」と訳しています。鼻であっても顔であっても、いずれにしても神と人が顔を向かい合っていることには変わりありません。これは 2 章後半で、人と、それに「向かい合う者としての助け手」(「エーゼル・ケネグドー」עֶזְרָא קְנֻגְדּוֹ)とのかかわりの型となっています。

●神である主が人の鼻にいのちの息を「吹き込む」ことで人は生きるものとなったのですが、この「**吹き込む**」の「ナーファハ」(נָפַח)が、同じくいのちと関係して用いられている箇所にエゼキエル書 37 章 9 節があります。それは終わりの日、全イスラエルが回復するためになされる神の奥義であり、驚くべき神の恩寵的行為です。

【新改訳 2017】エゼキエル書 37 章 9 節

そのとき、主は言われた。「息に預言せよ。人の子よ、預言してその息に言え。『【神】である主はこう言われる。息よ、四方から吹いて来い。この殺された者たちに**吹きつけて**、彼らを生き返らせよ。』」

●創世記1章と2章で異なる点は、1章では人を「**ご自身のかたち**」(「ベツアルモー・ベツエルム」**בְּצַלְמוֹ בְּצַלְמוֹ**)として創造し、**男**(「ザーハール」**זָכָר**)と**女**(「ネケーヴァー」**נְקִיבָה**)に彼らを創造したのに対し、2章では人の鼻に「いのちの息を吹き込むこと」で生きるものとさせたことです。ちなみに「男」を意味する「ザーハール」の動詞「ザーハル」(**זָכַר**)は「心に留める、記憶する」という意味ですが、これは神の関心と興味を含む存在という意味と考えられます。

●また、人間は大地の「**ちり**」(「アーファール」**עֶפְרוֹר**)という物質で造られています。その「ちり」で造られた人間に神である主がいのちの息を吹きかけられたことで、人間は生きるものとなったのです。同じ「ちり」でも、詩篇90篇3節にある「あなたは人をちりに帰らせて」の「ちり」とは語彙が異なります。詩篇90篇の「ちり」は「ダッカー」(**דָּכָא**)で、「人を神に立ち返らせるために、神の前に砕かれる」という積極的・恩寵的な意味合いがあります。同じ「ちり」でも原語を見ると異なっています。人間は土の「ちり」(**עֶפְרוֹר**)で造られましたが、罪を犯して「いのちの息」を失ったために、死ぬと「土に帰る」ことが定められてしまいました。

【新改訳2017】創世記3章19節

あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。

あなたは土の**ちり**(**עֶפְרוֹר**)だから、土の**ちり**(**עֶפְרוֹר**)に帰るのだ。」

●しかし人が再びいのちの息を与えられて生きるものとされるためには、神の前に砕かれたちり(**דָּכָא**)とならなければならないのです。

●大地を「**耕す**」人もまだいなかったという表現は、人の務めが大地を「耕す」ことにあることが分かります。エデンの園に置かれた人の務めが2章15節で「耕すこと」と「守ること」にあることが記されていますので、そこで再度、取り扱いたいと思います。

2. エデンの園に置かれた人と「木と川」とのかかわり

2:8 神である【主】は東の方のエデンに園を設け(=植えた「ナータ」**נָטַע**)、そこにご自分が形造った人を置かれた(**שָׂם**)。

●「**東の方**」(「ミケデム」**מִקְדָּם**)・・多くの聖書が「東の方」と訳している「ケデム」(**קְדָם**)ですが、どこを規点として東の方なのかは明確ではありません。この語彙は「昔」「以前」「前」も意味し、その場合の時の「起点を表わす」前置詞の「ミン」(**מִן**)の省略形で**מ**を接頭語とした用法で「以前からある」(**מִקְדָּם**)、つまり人を創造される以前からあるとも解釈できます。用例としては、イザヤ書46章10節の「わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を**昔から**告げ」の「昔から」(「ミツケデム」**מִקְדָּם**)がそうです。

●「**エデンに園を**」(「ガン・ベ・エーデン」**גַּן־בְּעֵדֶן**)。「ガン」(**גַּן**)とは「四方で囲まれた庭」という意味。七十人訳は「園」を「パラダイス」と訳しています(エデンの園=**παράδεισον ἐν Ἐδεμ**)。旧約で「エデンの園」という表現は創世記2章8節の他に、2章15節、3章23, 24節、エゼキエル書36章35節、ヨエル書2章3節の6回です。特に、エゼキエル書36章35節では、イスラエルの家がメシア王国においてエデンの園のように回復することが預言されています。

【新改訳2017】エゼキエル書 36章35節

このとき、人々はこう言うだろう。『あの荒れ果てていた地は**エデンの園**のようになった。廃墟となり、荒れ果て、破壊されていた町々も城壁が築かれ、人が住むようになった』と。

●神は、患難時代において真に悔い改めたイスラエルの民を約束の地(カナン)に住み着かせ、大いに祝福されます。それによって神がアブラハムと結ばれた契約が完全に成就されるのです。イエシュアの到来(初臨)の目的は**イスラエルの家の滅びた羊のところに來られ(遣わされ)**、天の御国が近づいたことを宣べ伝えることでした。

2:9 神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての

木(**כָּל־עֵץ**)を、そして、園の中央にいのちの木(**עֵץ הַחַיִּים**)を、また善悪の知識の木を生えさせた。

●見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、また、園の中央にもいのちの木と善悪の知識の木を「**生えさせた**」(「ツァーマハ」**צִמְּוּ**)。人が造られた後、エデンの園に「食べるのに良い」すべての木が芽生えさせられました。「ツァーマハ」(**צִמְּוּ**)は創世記2章5節では「まだ芽生えていなかった」と否定的に使われていました。「ツァーマハ」(**צִמְּוּ**)が名詞で使われると「若枝」「ツエマハ」(**צִמְּוּ**)となり、メシアを表わす比喩となります。「すべての木」はメシアなる「食べるのに良い」神のことばそのものです。エデンの園の中で人は神のみことばによって生きていたこととなります。

●「**園の中央に**」と訳されたことばは「**園のど真ん中に**」という意味です。「の中央に」「のど真ん中に」のことをヘブル語で「ベトーフ」(**בְּתוֹף**)といいます。「中、間、真ん中」を意味する「ターヴェフ」(**תָּוֵף**)の連語形「トーフ」(**תוֹף**)に前置詞の「ベ」(**בְּ**)が付いた形です。創世記1章6節、3章3, 8節も参照の子と。いのちの木が園のど真ん中に位置していたということは、いのちの木にはどの側からでも到達できるということです。シナゴークでは、律法(トラー)の朗読台は会堂中央位置にその座を占めています。それは、トラーの教えがすべての出席者から等距離にあることを示すためだと言われています。

●出エジプト記 25章8節に「彼らにわたしのための聖所を造らせよ。そうすれば、わたしは**彼らのただ中に(בְּתוֹכָם)**住む。」(新改訳 2017)とあります。イスラエルの民が宿営する際、真ん中に幕屋の天幕(「オーヘル」**אֹהֶל**)が設営され、その周囲にはモーセ、およびアロンと三人の息子を始めとするレビ族が宿営します。さらにその周囲に十二部族が、東にユダの陣営(両脇にイッサカル、ゼブルン)、南にルベンの陣営(両脇にシメオン、ガド)、西にエフライムの陣営(両脇にマナセ、ベニヤミン)、北にダンの陣営(ナフタリ、アシエル)が配置されます。中央となる広場は、各陣営によって四方から大きく囲まれていま

す。いのちの木が園のど真ん中に位置していたように、天幕を通してイスラエルの神がイスラエルの民の**ただ中に**住まわれたのです。これもエデンの園の型を真似たものと言えます。

2:10 一つの川(נָחַלの単数)がエデンから湧き出て(צָץの分詞)、園を(אֶת־הַגֶּן)潤していた(הִקְשָׁה)。それは園から分かれ(פָּרַד)て、四つの源流(שָׂרָאの複数רְאִשֵׁי)となっていた。

●エデンから湧き出る一つの「川」が園を潤していたとあります。「**潤す**」と訳された「シャーカー」(הִקְשָׁה)は 2 章 6 節でも使われています。「シャーカー」は「水を注ぐ、水を飲ませる」の意味にも使われます。これは聖霊を表す象徴です。エデンは神のみことばと共に無限のいのちの水がよって潤され、渴くことがない世界です。イエシュアはサマリヤの女にこう言われました。「わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。**わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちの水が湧き出ます。**」(ヨハネ 4:13~14、新改訳 2017)と。まさにこれはエデンの園の回復を意味しています。

●**エデンから湧き出る川**は四つの川となって分かれ出ました。四つの川の「源流」は複数形で「ローシム」(רְאִשֵׁי)となっています。「源流」の原義は「ローシュ」(רֵשֶׁת)で「頭」を意味します。まさに人の内で泉となり、永遠のいのちの水が湧き出ることイメージさせます。聖書では「**四**」は「すべて」「すべての面において」「全世界」を意味する数です。そして「**分かれる**」と訳された「パーラド」(פָּרַד)は、地上の諸民族が洪水後にノアの三人の息子から「分かれ出た」というところでも使われています(創世記 10:32)。また神の計画を担う民の本流と支流を分ける意味でも使われています(創世記 13:9)。

●と同時に、神のご計画においては、「離散した全イスラエル」が最終的に全世界の四方から集められて、神の都エルサレムに連れ戻されます。それはすでにエゼキエルが預言している通りです。

【新改訳 2017】エゼキエル書 37 章 21 節

彼らに告げよ。『【神】である主はこう言われる。見よ。わたしはイスラエルの子らを、彼らが行っていた国々の間から取り、**四方から集めて**彼らの地(=エルサレム)に導いて行く。』

●「**川**」の原語は「ナーハール」(נָחַל)です。エデンの園にある源泉としての「一つの川」は、園の全体を潤すために四つの支流となって流れ出ます。そして、その後「一つの川」は、ヨハネの黙示録 22 章 1 節によると、「新しい天と新しい地」においては、御座から流れ出るいのちの水の「川」となり、川の両岸にはいのちの木があり、12 種の実をならせ、その葉は諸国の民をいやす(=元気づける)とあります。ここに、「エデンの園」と「聖なる都である新しいエルサレム」とが整合性を持っていることも分かります。

2:11 第一のものの名はピション。それはハビラの全土を巡って流れていた。
そこには金があった。

●ここには主動詞はなく、「**巡って流れていた**」と訳された冠詞付きの分詞「ハッソーヴェーヴ」

(הַסְּבִיב)があるだけ。第二の川である 13 節も同じく「クシュの全土を巡って流れていた」とあります。動詞の「サーヴァヴ」(סִבַּב)は、イエシュアがガリラヤの全域を「巡って」に使われています。そのようにして、ガリラヤ全土にくまなくイエシュアが御国の福音を宣べ伝えられたのは、エデンから流れる地には「良質の金や宝石(=「ショハム石」とは「縞めのう」のこと)があった」ように、御国には何にもかえがたい尊い宝があることを教えるためだったと考えられます。

- 2:12 その地の金は良質で、そこにはベドラハとショハム石もあった。
 - 2:13 第二の川の名はギホン。それはクシュの全土を巡って流れていた。
 - 2:14 第三の川の名はティグリス。それはアッシュルの東を流れていた。
- 第四の川、それはユーフラテスである。

●さらに、14 節の第三の川の「流れていた」は冠詞付きの分詞「ハホーレーフ」(הַהֲלִיף)が使われています。これは動詞の「歩く」を意味する「ハーラフ」(הָלַף)が語幹となっていますが、おもむくままに歩いて(=流れて)いるのではなく、神のご計画とみこころにそって流れていることを指し示しています。イエシュアも同様、御父のご計画とみこころに従って歩まれていました。十字架の道さえもそうです。「ハーラフ」(הָלַף)は神の前における人のすべての行為を要約する統括用語と言えますが、イエシュアがその模範を示した最後のアダムとなりました。第四の川には「流れていた」という語彙はありませんが、これはヘブル的修辞法の一つで、省略していると考えられます。この第四の川の流れ行くところから、アブラハムが神に召し出されているのです。

●「エデンの園」にある「すべての木」(食物としての実なる木)と「源泉としての一つの川」は、いずれも「神のことば」であるイエシュアを象徴するものです。また、「一つの川」は、やがて終末におけるメシア王国においてエルサレムの神殿から流れ出る豊かないのちの水をも象徴しています。

●やがて訪れるメシア王国(千年王国)では「渇き」がありません。なぜなら、生ける「水」と「その流れ」が豊かにあるからです。新天新地における「聖なる都」、「新しいエルサレム」にも、神と子羊との御座から流れ出る「水晶のように光るいのちの水の川」があるのです(ヨハネの黙示録 22:1)。その「いのちの水の川」とは御霊ご自身とも言えます。その「水」を飲むことのできる人は幸いです。それゆえ、「ああ、渇いている者はみな、水を求めて出て来い。」(イザヤ 55:1)と呼びかけられているのです。「水」はヨハネの福音書において重要なテーマとなっています。「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」(ヨハネ 7:38)とイエシュアは言われました。「聖書が言っているとおり」とあるように、この祝福はすでに旧約で何度も繰り返して語られていたことなのです。

(1) 詩篇 46 篇 4～5 節【新改訳 2017】

- 4 川がある。その豊かな流れは神の都を喜ばせる。いと高き方のおられるその聖なる所を。
- 5 神はそのただ中におられその都は揺るがない。神は朝明けまでにこれを助けられる。

(2) エゼキエル書 47 章 1, 9 節【新改訳 2017】

- 1 彼は私を神殿の入り口に連れ戻した。見ると、水が神殿の敷居の下から東の方へと流れ出ていた。神殿が東に向

いていたからである。その水は祭壇の南、神殿の右側の下から流れていた。

9 この川が流れて行くどこでも、そこに群がるあらゆる生物は生き、非常に多くの魚がいるようになる。

この水が入ると、その水が良くなるからである。この川が入るところでは、すべてのものが生きる。

(3) ゼカリヤ書 14 章 8 節【新改訳 2017】

その日には、エルサレムからいのちの水が流れ出る。その半分は東の海に、残りの半分は西の海に向かい、夏にも冬にも、それは流れる。

3. エデンの園における人間の務め(「耕すこと」と「守ること」)

2:15 神である【主】は人を連れて来て(לָקַח)、エデンの園に置き(נָח)、そこを耕させ(עָבַר)、また守らせた(שָׁמַר)。

●主要動詞は、神が人をエデンの園に「連れて来て」、「置いた」のです。「エデン」とは「楽しみと美味しさの豊かなところ」「贅沢きわまりないところ」という意味ですが、神はそこに人を連れて来て置いたのです。「置いた」と訳された動詞は「ヌーアツハ」(נָח)で、「安息を与える、憩わせる」という意味もあります。何のために置いたのかと言えば、ヘブル語原文では「そこを耕すために」、また「そこを守るために」とあります。

(1) 「耕す」とは

●どの木からでも思いのまま食べてよいと言われたエデンの園で、なにゆえに人は「耕す」必要があったのでしょうか。それは、「耕す」とは祭司用語で、神から与えられたすばらしいものを味わい、その喜びを見出す務めです。エデンの園にある安息を十分に楽しむためであると考えられます。ヘブル語の「ヌーアツハ」(נָח)は、イエシュアのことばの約束にもあります。それはマタイの 11 章 28 節で「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(新改訳 2017)の「休ませてあげます」が「ヌーアツハ」です。

●「ヌーアツハ」の名詞「メヌーハー」(מְנוּחָה)は「憩い」「安息」を意味します。「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。」という詩篇 23 篇の「いこいの水のほとり」の「憩い」、これが「メヌーハー」です。つまり、主が私をそこ(憩い、安息)へと伴われるのです。主との深い親密な交わり、かかわりが私たちに安息をもたらすのです。エデンの園はそうした安息のある場所だったのです。神の与える安息を味わい、そのすばらしさを楽しむという務めが「耕す」という言葉に込められています。

(2) 「守る」とは

●しかしもう一つ、「守る」という務めがあります。それはいわば**王的務め**です。「エデンの園」を治め、

管理するという務めです。なにゆえこの務めが必要なのでしょう。最初の人アダムはこの務めについてよく分からなかったのではないかと思われまふ。神が光と闇を区別されたように、エデンの園を光の園として管理し、闇の支配から区別することです。その証拠に、17 節で「善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」と言われました。つまり、食べてよい木と食べてはならない木を区別するように言われたのです。これは、神である主が光と闇があることを予め人に教えているということです。エデンにある良いものを存分に楽しむことができますが、闇の支配があること、そのためにその支配に陥らないように、人は次の神の声に聞き従わなければならなかったのです。

●後に、神は人類の救いの担い手となるべく選ばれたイスラエルの父祖、アブラハムに対して次のように言われました。

【新改訳2017】創世記22章18節

あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。**あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。**

●創世記 22 章と言えば、アブラハムの信仰生涯において最大の試練となった出来事を記す箇所です。その試練に勝利したアブラハムに対して神が語ったことばは、「**あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。**」でした。神の声に聞き従うということは、どんな犠牲いげにえにも勝ることなのです。しかしアブラハムの子孫であるイスラエルの民はそのことに失敗しました。そこで神の御子イエシュアが遣わされました。御子イエシュアのしたことはまさにこの「御父の声に聞き従うこと」だったのです。イエシュアはアダムアダムの失敗を、イスラエルの民の失敗を踏み直すために、第二のアダムとして、また真のイスラエルとして「エデンの園を回復する」ために来られたのです。アダムに与えられた「祭司的務め」と「王的務め」は、教会に対しても、またイスラエルに対しても、「祭司の王国」(出エジプト記 19:6)、「王である祭司」(1ペテロ 2:9)、「王国とし、祭司としてくださった」(黙示 1:6)として継承されています。

4. 「食べる」ということ

2:16 神である【主】は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま**食べて**よい。

2:17 しかし、善悪の知識の木からは、**食**べてはならない。その木から**食**べるとき、あなたは必ず死ぬ。」

●16～17 節には「**食べる**」を意味する「アーハル」(אָהַר)という語彙が登場します。この語彙は神と人間との関係においてきわめて重要です。「食べる」ということばを巡って、「どの木からでも思いのまま食べてよい」というエデンの園の豊かさを存分に楽しむべきことと、「善悪の知識の木から取って食べてはならない」というエデンの園における唯一の禁止事項を守ることが示されています。「食べてよいもの」と「食べてはならないもの」を置くことによって、彼らが神の言われることだけに聞き従うことを教え諭す言葉です。残念ながら二人はこれに従うことができませんでした。

●神が人やすべての生き物を造られた時、「食物」を与えられました(創世記 1:29~30)。ですから人にとって食べることは生きることと同じ意味を持っていると言えます。またそれは人にとって楽しみ、喜びをも意味します。「食べる」という行為は、神との交わりを意味していました。イスラエルの民が荒野でマナを食べさせられたのは、「人はパンだけで生きるのではなく、人は【主】の御口から出るすべてのことばで生きるということ」を教えるためでした。「御口から出るものすべてのことば」とは、すなわち神のことばを受け取り、それに聞き従うことで生きることを意味しています。すなわちそれは神との交わり、神とのかかわりを指し示しています。

●イエシュアがなされた「五千人の給食」の奇蹟は、このことを教えるものです。「五つのパンと二匹の魚」は何を意味するのでしょうか。この奇蹟は、「五つのパンと二匹の魚というわずかなものを主にささげるならば、主はそれを何倍にもして祝福してくださる」という意味ではありません。「五つのパンと二匹の魚」が意味するのは、五つのトーラー(基本法としてのモーセ五書)と参考書としての「歴史書」と「諸書」の二つです。これを「二匹の魚」で表しています。すなわちユダヤ教のタナフ(私たちの言う「旧約聖書」)によって、大勢の人たち「養った」という奇蹟です。しかも有り余ったパンくずはイスラエル全体を象徴する神の民である「12」のかごを満たすものでした。

●「**食べる**」という出来事は他にあります。復活後のイエシュアが漁をしていた弟子たちに対して「朝の食事をしなさい」と言って、パンと魚を準備されていたという出来事です(ヨハネ 21:9~13)。弟子たちはこの食事に気づかりました。この話の中に、弟子のシモン・ペテロが引き上げた網には 153 匹の大きな魚でいっぱいであったという話があります。なにゆえに「シモン・ペテロの網に 153 匹」なのでしょう。か。「シモン」という名前の弟子はイエシュアが選んだ 12 弟子の筆頭です。それはイスラエルの代表を象徴し、しかも「シモン」という名は「神の声を聞く」という意味から来ています。そのシモンと 153 という数がどう結びつくのでしょうか。

●神とのかかわりを表わす「食べる」を意味するヘブル語の「アーハレ」(אָהַל)ですが、このことばを構成している三つの文字、すなわち「アーレフ」(א)、**「カフ」**(כ)、**「ラーメド」**(ל)という文字から順に「1」+「10」+「40」=「51」という数字を導き出すことができます。シモン・ペテロはイエシュアの十字架の前にそのかかわりを「三度」否定しました。それに対しイエシュアは死からよみがえってから弟子たちにご自分を表わされたのは、「三度目」だとヨハネは強調しています(21:14)。さらにこの後 21 章 15 節からの箇所「三度」も「ヨハネの子シモン、あなたはわたしを愛しますか。」と尋ねられ、それに対してペテロは「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです。」と答え、彼とイエシュアとの関係の回復が「三度」確認されます。つまり神とのかかわりを表わす「アーハレ」(אָהַל)のゲマトリアは「51」ですから、これを「三度」繰り返すとその答え「153」となります。このように、ペテロが引き上げた「153」匹の魚とは、イエシュアとシモン・ペテロ、あるいは神とイスラエル、神と人との交わりとの関係の回復を指し示している数と考えられます。そして 153 匹の魚でいっぱいになった網が「破れなかった」ことにも、この回復された神と人との関係がもはや決して絶えることがないことが示されていると考えられます。イエシュアの「さあ、朝の**食事をしなさい**。」ということばの中に、神と人との親しいかかわりが示されているのです。これは教会に対しても語られています。

【新改訳 2017】 黙示録 3 章 20 節

見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに**食事**をし、彼もわたしとともに**食事**をする。

5. ふさわしい助け手との一体

- 2:18 また、神である【主】は言われた。「人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手(עֵזֶר כְּנַגְדּוֹ)を造ろう。」
-
- 2:20 人はすべての家畜、空の鳥、すべての野の獣に名をつけた(קָרָא)。
しかし、アダムには、ふさわしい助け手が見つからなかった。
- 2:21 神である【主】は、深い眠りを人に下された。それで、人は眠った。
主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。
- 2:22 神である【主】は、人から取ったあばら骨を一人の女に造り上げ(בָּנָה)、
人のところに連れて来られた。
- 2:23 人は言った。「これこそ、ついに(=「今度こそ」 הַפְּעַם)私の骨からの骨(עֶצֶם)、
私の肉からの肉(בָּשָׂר)。これを女と名づけよう(קָרָא)。男から取られたのだから。」
- 2:24 それゆえ、男は父と母を離れ(עָזַב)、その妻と結ばれ(דָּבַק)、ふたりは一体
(בָּשָׂר אֶחָד)となるのである。
- 2:25 そのとき、人とその妻はふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。

●何故、神である主は「人がひとりであるのは良くない」と言われたのでしょうか。「人はすべての家畜、空の鳥、すべての野の獣に名をつけた。」ということは、人が彼らを支配するものであったことを意味します。「しかし、アダムには、ふさわしい助け手が見つからなかった。」というのが、「人がひとりであるのは良くない」と言われた理由です。しかし、人がひとりであるのは良くないことの原因はもっと深いところにあります。エデンの園は天にあるものの写しであり、天におられる神は永遠に交わりの存在です。それゆえに、アダムには神の交わりを映し出す「ふさわしい助け手」が必要とされたのです。

●「**ふさわしい助け手**」のことを「エーゼル・ケネグドー」(עֵזֶר כְּנַגְדּוֹ)と言います。「エーゼル」とは「助け手」を意味し、「ケネグドー」(עֵזֶר כְּנַגְדּוֹ)の「ネグド」(נֶגֶד)は「向かい合う」ことを意味し、前置詞の「ケ」(כְּ)は「~のような、~として」の意で、「彼と向かい合う者としての助け手」となります。つまり神はアダムのために彼の最も必要な助け手として、もう一人の人(女)を造られたのです。ここの「造られた」と訳された動詞は、本来「建て上げる」という意味の「バーナー」(בָּנָה)が使われています。そしてこの語彙の中に、実は神の御子を意味する「ベーン」(בֵּן)が隠されていることを悟らなければなりません。教会はキリストの花嫁であり、その花嫁を建て上げるのは花婿なるキリストであるというメッセージが隠されているのです。

●このことは奥義です。使徒パウロは「夫と妻」の結婚を「神と人」との交わりの奥義として理解しました。「これを女と名づけよう。男から取られたのだから。」という意味はヘブル語で見ないと理解できません。創世記 1 章では男は「ザーハール」(זָרָה)、女は「ネケーヴァー」(נְקֵבָה)でそのつながりはありませんが、創世記 2 章の「男」は「イーシュ」(אִישׁ)、「女」は「イツシャー」(אִשָּׁה)で、本質的に一つの存在から造られていることを表わす語呂合わせとなっているのです。

●「それゆえ、男は父母を離れ、その妻と結ばれ」とありますが、「離れ」は「捨てる、見捨てる」という強い意味の動詞「アーザヴ」(אַזַּב)です。それは妻と「結ばれる」(「ダーヴァク」דָּבַק)のためにはなくてはならないです。この動詞を調べてみると、①結びつく、縁を結ぶ ②すぎる、堅くすぎる ③まといつく ④くつつく、くつついて離れない ⑤心が惹かれる ⑥そばにいる、そばから離れない ⑦へばりつく、打ち伏す ⑧追いつく、追い迫る、押し迫る ⑨堅く守る・・・このように「ダーヴァク」(דָּבַק)は、神と人、および人と人のかかわりがきわめて親密であることをうかがわせる動詞です。ちなみに、嫁のルツが姑ナオミに「すがりついた」ことが、神のご計画においていかにすばらしい結果をもたらしたか、それは圧巻です。

●また、男と女は「**一体**」となるように神に造られました。「**一体**」と訳された「一」の「エハード」(אֶחָד)は、神ご自身(三位一体)の本質を表わすきわめて重要な概念です。同様に、神と人との関係において、夫婦の関係において、ユダヤ人と異邦人との関係において、またイスラエルと教会との関係において、そして神の子どもたちと被造物との関係においても、神ご自身の「三位一体性」が土台となっています。地にあるすべてのかかわりは、すべて天の写しとなっているのです。そしてエデンの園においてはその原初的の写しが啓示されているのです。

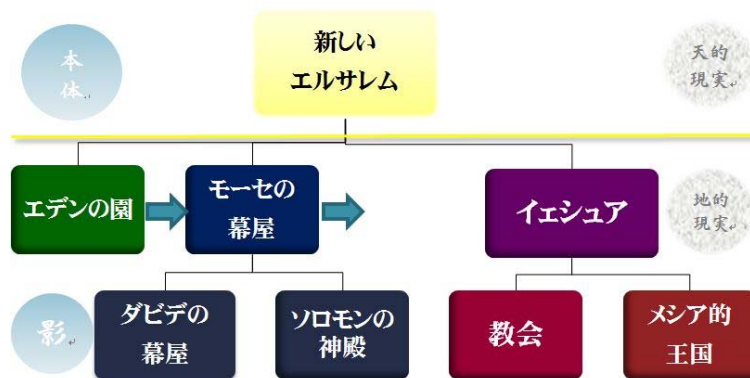
●次に 24 節の「**一体**」と訳された「バーサール・エハード」(בְּרִשָּׁה אֶחָד)にある「**体**」も重要です。それは、有機的、親密なかわりを表わす概念です。この「バーサール」(בְּרִשָּׁה)こそ、神と人、夫と妻、かしらとからだ、花婿(キリスト)と花嫁(教会)という結婚の一体性の概念を啓示するものです。からだの存在なしに夫婦の愛が成立しないように、からだの存在なくして神と人とが共に住むという御国を完成させることはできないのです。また、かしらなるキリストはからだなる教会の存在なしに何をすることもできないのです。このように、からだは永遠の愛のかかわりを実現させるためになくてはならないものなのです。それゆえに、イエシュアが死からよみがえり、信じる者にからだのよみがえりを約束しておられることは究極的な福音となるのです。

●イエシュアが受肉されたその秘義は、キリストのからだから流れる出る血潮によって「バーサール」(בְּרִשָּׁה)が贖われるだけでなく、むしろ、復活(よみがえり)のいのちによって新しくされた「バーサール」によって、永遠に神と人とが共に住むことが実現するということです。これこそが、天と地の創造がなされる前に神があらかじめもっておられたご計画であり、エデンの園の回復なのです。その意味において、今回の「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。」というのは、御国を実現する上で、必要不可欠なことであったのです。

●イエシュアが「御国の福音」を宣べ伝えた時に、多くの病める者たちが癒されました。また死んだ者

(イエシュアはこれを「眠っている」と表現します)が生き返る奇蹟をなされました。これは決してイエシュア自身に人々の注目を集めるための一時的な手段ではなく、むしろ、永遠の御国の本質を現わすデモンストレーションであったのです。それゆえ、ヘブル語の「からだ」を意味する名詞「バーサル」(בָּרָסָל)の動詞「バーサル」(בָּרַסָל)のピエル態(強意形)が「良い知らせを告げ知らせる」という意味を持っていることは、特筆すべきことなのです。それゆえ、「からだ」に関する倫理のすべては、この根源的な事柄から理解される必要があるのです。

ヘアハリート



●神が人とともに住む家として設けてくださったのは「エデンの園」(=パラダイス)です。歴史的にはそれが「幕屋」「神殿」「教会」「メシア王国」(御国)、そして「新しいエルサレム」と変遷していきますが、それらはすべて「エデンの園」にあったものの言い換えです。まさに預言者イザヤが神に代って語ったように、「わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごととは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる』と言う」とあるとおりなのです(イザヤ書 46:10)。エデンを再度見直すことで、そこに神のご計画の全貌を悟ることができるようになりますと信じます。なぜなら、神のご計画の究極の目的は「エデンの回復」に尽きるからです。旧約聖書と新約聖書は別のものではなく、神のはかりごとは本来一つにつながっているという読み方をこれからもしていきたいと思えます。

2018.9.24

第 15 回 ヘブル・ミドラーシュ例会
空知太栄光キリスト教会牧師: 銘形 秀則